



# みち 古道が紡ぐ物語



## 天誅組の足跡をたどって ②決戦編

～高取城攻防戦・そして十津川へ～

急進的な尊王攘夷派が京から一掃された「八月十八日の政変」で、大和行幸は中止。「皇軍御先鋒」という大義名分を失った天誅組は、勤皇の地・十津川で郷士約1,000名の加勢を受け、高取城奪取を目論みます。今回は、高取城攻防戦の様相と十津川街道沿いに点在する史跡を描きます。

### 倒幕の賽は投げられたり、徹底抗戦を決す

#### ■天誅組志士、政変を知り憤る

五條代官所を襲撃して大和国南部を押さえ、後は天皇行幸を待ち受けるばかりと考えていた天誅組のもとに、8月19日、急報が届く。宮中で政変があり、大和行幸は中止、急進的尊攘派の公家や長州藩志士らが京都から追い落とされたという。

さらに、政変の前日（8月17日）の段階で計画に気づき、中止させるため三条実美が差し向けた使者として平野国臣らが到着。

政変の報に接した天誅組志士は悲憤慷慨、軍議の末、幕府に徹底抗戦を挑むことで一致した。もとは決起を止める立場の平野らも天誅組に感化され、平野を除く3名がそのまま天誅組に参加。平野はいったん京都へと戻り、その後の倒幕挙兵事件（生野の変）の主導者となる。

#### ■天辻峠に本陣を置く

天誅組は、来たるべき追討軍との戦いに備えて、五條から十津川街道（現在の国道168号線）を南に下った天険の地・天辻峠（五條市大塔町）に本陣を置くことにした。その途中、一行は賀名生の堀家（五條市西吉野町）に立ち寄る。

堀家は、室町期の南北朝騒乱の折、後醍醐天皇はじめ南朝の歴代天皇が行宮（仮の皇居）とした名家である。吉村虎太郎は、この由緒ある家が戦乱に巻き込まれることを防ぐため、「皇居」の額を門前に掲げさせた。

現在、「賀名生の里歴史民俗



天辻本陣跡  
（五條市大塔町）

資料館」が南朝と縁深い当

地の歴史を語り伝えて

おり、同館の隣には堀家住宅が当時から変わらぬ姿で佇む。

「皇居」の額（右）を掲げる堀家（下）



#### ■下市勢と十津川郷士の加勢

8月22日、丹生大明神社（現・丹生川上神社下社、吉野郡下市町）の神官・橋本若狭が、同志を連れて天誅組に合流。付近の地理に明るい橋本は、少ない手勢でゲリラ戦を展開、追討軍を大いに苦しめることになる。

一方、吉村は本隊を離れて十津川郷へと向かい、政変の事実は伏せたまま、郷士の協力を要請。吉村の話しぶりと人柄に心を打たれた川津村の庄屋・野崎主計は、郷を挙げての参加を決断し、25日までに十津川郷士約1,000名が天辻本陣に参集した。この兵力増強を受け、天誅組は目標を天辻峠防衛から高取城奪取へと変更した。

当時の高取城は、日本有数の山城であり、これを奪えば、各地で倒幕の狼煙が上がるまで、当面の間持ちこたえることができるといふ算段であった。



丹生川上神社下社（吉野郡下市町）

## ■高取城奪取失敗、吉村負傷

8月26日、高取城下を目指し進軍する天誅組本隊の隊列に、突如砲銃撃が浴びせられる。動向を察知した高取藩が、鳥ヶ峰に陣地を築き、小勢ながら準備万端整えて天誅組を待ち受けていたのである。



鳥ヶ峰古戦場跡  
(高市郡高取町)

対する天誅組は、吉村ら主力部将が不在。主将・中山忠光は参集以来2日間にわたり不眠不休の十津川郷土に強行軍を命じ、狭い街道を偵察もせず二列縦隊で上らせる愚を犯し、敵に損害を与える前に部隊は潰走した。

この不甲斐ない結果に憤激したのは、御所への偵察のため戦列を離れていた吉村である。吉村は氣勢を上げるため、自ら高取城下に夜襲に向かうが、暗がりの中で味方が誤射した銃弾を腹部に受け、撤退を余儀なくされた。

## ■吉村ら撤退指示を無視、天辻峠死守を主張

27日未明、夜襲に失敗し重傷を負った吉村が五條へ戻ってくると、既に本隊は天辻峠の本陣へと引き揚げた後である。残された水郡善之助ら河内勢とともに、すぐに陣を引き払い、翌28日に天辻本陣に着いたが、本隊は新宮方面に脱出するため、十津川街道を南に下った長殿村(現・吉野郡十津川村長殿)に移っていた。

本隊では、高取城の奪取に失敗した今、戦闘継続は不可能と見て、新宮方面への脱出・西国での再起を企図し全軍に南下を命令したが、吉村らは天辻峠の死守・五條突破でしか活路を見出せないと考え、命令を無視。30日には、紀州藩兵に夜襲をかけ、撤退に追い込むことに成功した。

その頃、本隊は十津川街道を更に南進し、風屋村(現・十津川村風屋)に着陣。そこで別働隊の南下を待ち続けたが、翌9月1日、紀州藩が熊野川沿いの船着場を全て押さえたとの情報が伝わる。

完全に退路を断られた本隊は、結局吉村らの意見を容れ、9月6日、天辻峠に戻る。しかしこの

間にも、追討軍は強固な包囲網を張り巡らしていたのである。

(次号に続く)

(太田宜志)



風屋本陣跡(吉野郡十津川村)

## 天誅組関連時系列表

とき	主な出来事・天誅組本隊の足取り
8月18日	八月十八日の政変起こる。長州藩および三条実美ら尊攘過激派公家が京都から追放され、大和行幸の詔も白紙に戻る
8月19日	8月17日時点で三条実美が差し向けていた、平野国臣ら使者が到着。軍議の末、徹底抗戦を決定
8月21日	五條から、天辻峠の富豪・鶴屋治兵衛居宅に本陣を移す
8月22日	丹生大明神社の神官・橋本若狹が合流
	吉村、十津川郷に行き、川津村庄屋・野崎主計に協力を依頼
8月24日	十津川郷土約1,000名が天辻峠の本陣に合流。兵力増強を受け、方針が天辻峠防衛から高取城奪取へと変更される
8月25日	高取城攻撃のため、天辻本陣を出発
8月26日	高取城へ進軍中、鳥ヶ峰陣地から砲銃撃を受け、部隊が潰走。偵察のため本隊から離れていた吉村、激高して夜襲をかけるも、味方の銃撃を腹部に受け、遁走
	吉村ら別働隊の足取り
8月27日	水郡らを五條に残し、天辻本陣に撤退 吉村五條に戻る。後詰の水郡と合流、天辻本陣へ
8月28日	天辻峠から長殿村に移陣 吉村ら、天辻峠に到着
8月29日	新宮方面へ脱出を図るため、全軍に南下を命令 吉村ら、天辻峠死守を主張し動かず
8月30日	風屋村へ移陣 吉村ら、紀州藩兵に夜襲をかけ、撤退に追い込む
9月1日	紀州藩に熊野川の船着場を抑えられ、退路を塞がれる。さらに南の武蔵村へ移陣
9月3日	吉村ら、五條の敵陣を突破し、活路を開くことを献策
9月6日	本隊、天辻峠本陣に戻る

## 天誅組行軍の道程

